

を眺めると、曾てそこを通り過ぎた『時』の歩みに想到せずには居られなかつたからである。あの世紀末の頹廢した空氣、文明と進歩とを欲して遂に意の如くならざる人の暗い心、さういふ世紀末葉の濃い深い霧が曾て通り過ぎた後の佛蘭西だといふ感じを抱かずには居られなかつたからである。まづたく、ある人の言つたやうに、ペテログラアドやモスコオの方に起つた虚無思想、獨逸の方にあつた厭世哲學、それらのものと基調を同じくする寂寞感が一時この巴里の都の空を閉ぢ籠めたことを想像せずには居られなかつたからである。そして又、普佛戦争後に於ける瘁猛な人の性と憐むべき世紀に入るべしとの確信は心を痛ましめるといふやうなあのフロオベルの言葉に、すべてそれ等のことが思ひ合はせられるからである。その後を受けた佛蘭西の新しい時代にヘギイのやうな詩人が生れて来て、祖國のために身をさゝけるところまで行つたほどの強い實行の精神を振ひ興したといふことは、私の心をひいた。何よりも私は、そこまで懷疑と無氣力とに打ち勝つことの出來た確信の力に感じた。ヘギイの死は、多くの佛蘭西人への、殊に若い時代の青年への深い勵ましであつたやうである。私は巴里郊外のピョンクウルの方まで、しばらく無沙汰したモレル君の家族を見舞ひに行つて来たが、そ

の時もモレル君が蔵書棚の中にヘギイの遺著を探して、五六冊の詩集を見つけて来た。モレル君の細君もあの詩人の噂をして、「ヘギイは貧しかつた、その中であの仕事をした、ヘギイの死は佛蘭西の損失だ、」と私に語つた。

## 百二

四月の二十一日には、高村、正宗、藤田の諸君と共に日がへりロバンソン行を思ひ立つた。一行には、近く歸國の途に上るといふ大使館在勤の奥田君も加はつた。私達は奥田君への送別の意味を兼ねて、見るもの聞くもの戦争でないものは無いやうな斯の氣息のつまる空氣の中で、旅行者らしい一日を送らうにした。

最早黄色い金雀花の季節も疾くに過ぎて、丁香花の盛りの頃と成つて居た。私の住む町のあたりには、



ボツ／＼咲出した街路樹のマロニエの外に、あの丁香花の白や紫に密集して咲いたのを天文臺附近の人の家の石垣越しに見つけることは出来たが、しかも多くの花の感じは寧ろ初夏に咲くものゝそれに近かつた。前の年にも私はさう思つたが、斯うした土地に思ひ比べると自分等はもつとずつと濃厚な春に酔ふことの出来る國に生れたやうな氣もする。春が来る度にその感じが深かつた。

その日の一行は私達五人の外に、モデルを職業とする三人の女も一緒に巴里から伴はれて行つた。その中の一人は高村君に雇はれてしばらく君の畫室へ通つたことのある女で、他はその女の友達であるといふ。戦前の巴里には斯うした職業の女が五萬人を數へるほどあつたとは驚く。戦争の影響はこんな人達の生活の上にも深刻にあらはれて来て、使つて呉れる旅の美術家も少いと聞いた。モデルも霜枯時だと言ひたさうな顔付をした人達は、おそくその日を樂みにして、私達の一行に加はりに來たのだらう。巴里を出てブウ・ラ・レエヌの停車場あたりまで汽車で乗つて行つた頃は、ロバンソンも近かつた。その小さな停車場まで行くと、最早季にも遅いかと思つて居た季節がまだあの花のさかりを見せ、櫻桃も咲きみだれて居た。そんな花の野生ですら巴里では見られなかつたものだ。フォントオネ

エ・アウ・ロオズといふ村を過ぎて、やがて私達はロバンソンに着いた。小さな停車場で汽車から降りたばかりの所に、あの薔薇のやうな嫩い莖を垂れ下けた櫻桃の木があつたのも、何となく床しかつた。私達はろく／＼土も踏めない巴里のやうな石の町から出掛けて行つて足許の草の芽に、春らしい生の歡びを見つけた。戦時でロバンソンもさびしかつた。村の入口にある淺草式な悞樂の設備を見ても、奈何いふ場處であるかはおほよそ想像せられる。今は遊樂のために集まつて來る人もなく、見世物小屋か何かと思はれるやうな建築物もしんかとして居て、その戦時らしいさびさが一層草木の感じを深くした。間もなく晝飯時であつた。私達は物食ふ場處をさがした。やがて村の寺院の塔の見えるやうな田舎風な料理店の一隅に陣取つて、青く塗つた欄の外には李の花も見えるところで、一同晝飯をやつた。私も濃い葡萄酒に水をうめて飲んで、僅かに旅を慰めた。

その日はロバンソンの森の方へ一同で貸馬車を驅つた。藤田君は馬、モデルの中の二人だけは驛馬で、私達に隨いて來た。最初のうちこそ同行の女達もしほらしく居たが、料理店を出る頃からそろ／＼持前のモデル氣質を發揮した。この女達は揃ひも揃つて、明日のことも考へて居ないやうなボヘミヤ



んだ。唯、今日を楽しく暮せばそれでいゝ連中だ。巴里にはこんな女も居る、と思ふと、どうかすると私の心は急にあのピョンクウルのモデル君の家庭の方へ行き、巴里の植物園に近く住むレ井イ教授の家庭の方なぞへ行くことがある。そしてこれらの家庭に留守居する細君や、子息を戦地に送つた年とつた夫人のことなぞを想つて見ることもある。さういふ私が假令半日でも自分の側に居る女のこと気がつくと、人知れず私は顔を赤めすにはゐられないやうな氣もする。見る人が見れば奈何いふ風俗の女かぐらるは直ぐに分る斯うした氣輕な人達を除いて、私達旅行者と一緒に野外の春を樂まうとするやうな婦人は一寸見當りもしなかつたのだ。

三人のモデルはそんなことに頓着するやうな人達ではなかつた。樂しさうな叫び聲は、馬車の内にも、騾馬の上にも起つた。その聲は若葉の茂つた森の空氣に響けて行つた。時とすると馬丁の鞭を借りて自分で馬車を驅らうとするモデルもあつた。斯ういふ時に平素のユウモアを失はないのは高村君だ。君は馬車から下りて、戯れに騾馬にも乗つた。どうかすると君が後から歩いて居て、騾馬は獨りで先へ馳け出すやうな奇觀を呈した。にはかに騾馬が疾驅しはじめたので、君はその背から飛び下りたの

だ。斯うしたありさまを眺めた時のモデル達のはしやぎやうはなかつた。あるものは女ばきの靴で馬車の蹴込みを蹴つて悦んだ。

靜かな森の中に馬車や騾馬を停めて、草花を集めるといふことも、モデル達の得意にする樂みらしかつた。あるものは深い藪のかげの方から可成澤山な葦を集めて來た。その邊には、守備の太鼓を前に置き、森の草をしいて休息顔な佛蘭西老兵の群を見かけたぐらるのもので、物音一つ聞えて來なかつた。戦争が何處にあるかと思はれるほど靜かだつた。

歸りには、私達は思ひ／＼に薄日の泄れた森の中の道を元來の方へと引返した。モデル達は途中で李の枝を折りに馬車や騾馬から降りて、白い花の咲いたのを車に積んで村まで歸つた。

『西洋には、享樂といふことが發達して居ますね。』

とロバンソンの停車場に引返してから、それを言出したのは高村君であつた。

『そりや、君、歐羅巴人の生活は享樂生活サ。』

と奥田君は答へたが、その時の二人の言葉は私の耳に残つた。旅に來て、歐羅巴人の享樂を見物する



辛さは、何もその日にはじまつたことでもなかつたが、しかしわだかまりの無い心でさういふことの言へる高村君達を私は羨ましく思つた。

## 百三

旅で逢つた女——美術家のいふ『手本』を職業にする女で、いろ／＼な人のことをこゝに書きつけて置きたいやうな氣もする。懇意な美術家仲間の畫室に出入する多くのモデルの中には、自然と私も名前を覺えたり、その人の話を聞いたりして、いろ／＼な性質の女のあることを知り得るやうに成つた。モデルとは言つても、相應な収入のあるものもある。それらの人達のことを一口に言ふことは出来な

い。しかし私が美術家仲間の畫室を訪ねる度に、そこで行き逢ふやうな女は概して極貧しかつた。

その中にイザンヌといふ女があつた。私は高村君が『美術巡禮記』の稿の中に次のやうな一節を見出す。

『フアギエール館の二階の便所の隣室にイザンヌといふ美しい女が住んだことがあつた。私が毎朝の用足しに上つて行くと、必ずしやがれた聲で調子外れに唄つて居るのを聞いた。彼女の歌は素敵に拙いもので、全く音律を爲して居なかつた。恐らく鼻唄にもなつて居ないやうである。彼女は寢床から目が醒めると直ぐ床の中から唄ひ出す。彼女の顔は日本の藝者に似たやうな表情を持つて居た。そして彼女の小さな味噌ッ齒は、すくなからず彼女の顔に愛嬌を添へて居た。彼女の頭髮は佛蘭西の若い「でんぱう」肌な女に屢々見るやうに、お河童に短く切下けられて居た。彼女は曾て女記者をして居たことがあるそうで、文章も筆跡もなかく見事であつた。彼女は流行などを無視して情人の手づから縫ふて呉れる變つた様式の服などを平氣で着て歩いて居たが、そんなものがまた彼女の風采によく似合つて、頗る異采を放つて居た。彼女はその美貌と才氣とをもつて一時は羅甸區にその名を知られて居たさうだが、永い間のボヘミアン生活がすっかり身に浸みて、飽くことを知らぬ本能の耽溺に、酒を呑みコカインを嗅いで全く健康を害し頭も體も目茶々々にしてしまつた。コカインの中毒で、だ



んくヒステリックになつて、仕舞には彼女の情人からも紙屑のやうに捨てられたのである。その後、彼女を助くる人もなくなり、曾ては女王の如く權威を振つたカフェ・ロオトンドに來ても、誰一人顧るものもなく、瘠せた野良犬の如く憐れに窺れて居た。』

私が藤田君の畫室に見つけたのもこのイザンヌであつた。この世の悲しいも辛いも嘗め盡して、淪落のどん底にある身を僅かに君の畫室に寄せて居るやうなイザンヌであつた。

でも、私が最初に見た頃のイザンヌはまだく元気だつた。懇意な美術家仲間の集つて居る中で、藤田君が女友としての彼女は『タンゴ』の一節も踊つて見せるほどの元氣をもつて居た。時を置いて行き逢ふ度にイザンヌは衰へて居た。私はこの女の衰へ方のあまりに激しいのに驚かされるやうになつて行つた。イザンヌの過去に就いては私は殆んど聞いたことがない。唯、彼女が地方の佛蘭西人の家庭に生長して相應な教育を受けたことや、不羈と無拘束とを求むる心から巴里に來て青年の美術家に交りをつんだことや、それから次第にモデルの群の間に身を投ずるやうになつたことだけを聞いて知つて居る。多くの無智で卑しけなモデルに比べたら、彼女の顔や風采にはその窺れた中でもどこか

に人の心をひく床しさがあつた。同時に、彼女の激しい衰へ方は一種の恐怖をすら誘ふやうな性質のものであつた。

この疲労と衰弱とで震へて居るやうなイザンヌと連立つて、私は藤田君と一緒にモン・バルナツスの並木町を歩いたことがある。高村君がイザンヌを評して『流行などを無視する女』と言つたのは面白い觀察で、確かに彼女には一種尊敬の念をさへ起させるほど世にありふれた女と違つたところもあつたやうであるが、さういふ矜持も最早彼女には見られなかつた。有るものはたゞ風采などに關はないといふ物憂い表情のみであつた。着のみの着のまゝのやうな彼女の面白い服装や、その褪せた色から發散する頹廢した感じなどは、通りすがりの男や女の眼をひいたほどである。それにも關らず、彼女は私達と一緒に極靜かに歩いて行つた。やがて私達はある小さな珈琲店で珈琲の一杯づゝも温めて貰はうとしたが、やゝもするとイザンヌが何か思ひ出したやうに飲さしの珈琲茶碗を前に置いて突然泣出すので、その店にも長くは腰掛けなかつた。私達はイザンヌを誘つて、モン・バルナツスの通りからルキサンブルの公園前へと出た。羅馬舊教の『コムユニオン』の儀式のある頃で、白い清



楚な服装をした娘達が町を往たり來たりして居た。例の『リラ』の珈琲店の横手あたりから望むと、青々としたマロニエの並木も心地の好い時で、その若葉の影を見ても楽しかった。四月の下旬から五月へかけての巴里の最も楽しい時が漸く來たといふ氣もした。私達の行く先には春らしい日の光の中に群がり戯れる子供等も多かつた。イザンヌは先の珈琲店で啜泣したのも忘れたかのやうに、多くの子供等の遊ぶさまに眺め入りながら笑つた。「この世がつく／＼厭になつたやうです。」と藤田君は歩き／＼イザンヌのことを私に言つて見せた。

私がこの憐れな女と連立つて公園を歩いて見たのは、後には前にもその時ぎりであつたが、その頃のイザンヌは強いコカインから起る幻覺を何よりの歡びとして、公園からの歸り途にもあの劇薬を買ふことを藤田君にねだるやうな人であつた。彼女は盗んでも飲みたくなるといふほどのコカインの耽溺者であつた。彼女から受ける寒い感じは、老婆からでも受けるものゝそれだ。こんな極度の倦怠と疲勞とを見せつけられて、どうして心あるものがイザンヌのやうな女の運命を考へずに居られやう。しかし、イザンヌはまだ若かつた。どうかして生やうと努める心は彼女にもあつた。私はさうした場

合の彼女を偶然見かけたこともある。それは私がシテエ・ファルギエールの方に美術家仲間を訪ねた時で、丁度山本君や森田君等はエイトユの田舎の方へ寫生旅行に出掛けた留守の頃であつたかと思ふ。古い別荘風な建築物もひっそりとして居た。私は二階へ上つて行つて、藤田君の畫室を叩いて見た。戦時も忘れさせるほどの靜かな光線が高い明り窓の方から射して來て居るところで、藤田君は自意匠から成る機織りの器具の柱に何かの模様を彫刻して居た。何一つその畫室にあるもので、時代を離れたやうな暢氣さと、原始的な趣味と、自ら織り自ら着る古代希臘へのあこがれとを語つて居ないものはないかのやうであつた。その畫室に、イザンヌを見つけた。彼女は隅の方にある寢臺の上に寢そべりながら、沈鬱な眼付をして、藤田君が何か彫刻するところを眺めて居た。

その日の藤田君は私への馳走振りに蓄音機などを聴かせて呉れた。曲の選擇をイザンヌに相談して、あれか、これかといったはり勝ちに言ふ藤田君の様子には、どうかして彼女の氣を引き立てたいといふ心が讀まれた。その時、畫室の扉を開けてマアセルといふ若い女が入つて來た。一寸イザンヌを見に來たモデル仲間だ。このマアセルが蓄音機に合せた踊りの身振りなどを始めると、イザンヌもそれに



元氣を得たかのやうに、滑るやうにして寢臺から下りた。二人の女は半分戯れのやうに、私達の見て居る前で靜かに『タンゴ』を踊り始めた。その二人の組合せた手からも、互ひに音楽の調子に合せて踊らうとする足取りからも、さすがにしなやかな線が流れて來た。さう思つて見て居るうちに、イザンヌは組合せた手も振りほどいて、力なげにマアセルの側を離れた。

この馳走振りの音楽よりも、もつと私におもしろく思はれたのは、藤田君がイザンヌに言ひつけて佛蘭西の詩を讀ませ、それを私に聞かせて呉れたことだつた。

『この方は詩を讀むのを聞きたいとおつしやる。何かお前も讀んであげたらよからう』

藤田君にそれを言はれると、イザンヌの眼は輝いて來たやうに見えた。彼女が奈何いふ詩を選ぶかといふことは可成デリカな感じを私に起させた。何故かといふに、彼女のやうに癡類の底に沈んで居るものはいづれ刺激的な破格な詩でも選びそうに思はれたからである。ところが彼女の取出して來たものは『ロオトンド』の珈琲店あたりで持てはやされそうな新奇なものではなくて、古い古い詩集であつた。ずつと娘の時からでも持つて來たやうな手摺れた本であつた。彼女はその中からギニイの詩を

一つ讀んで聞かせた。それから更に古い詩集の頁を繰つて、今度はラマルチンの詩を讀みはじめた。

無垢でまじりけの少い娘時代でも思ひ出したやうな涙が、そのうちにイザンヌの顔を流れて來た。藤田君は寢臺に腰掛けて聞き、私は壁の側の椅子に腰掛けて聞いて居たが、蒼ざめたうちにもどこかにまだ紅味の残つたやうな彼女の頬を傳ふ涙は膝の上にひろけた古本の紙の上に落ちた。彼女は讀んで聞かせるにも耐へられなくなつたといふ風で、讀みさしのラマルチンの詩を閉ぢたかと思ふと、いきなりその詩集を寢臺の方へ叩きつけた。

その時ほどイザンヌらしいイザンヌを私も見たことがなかつた。彼女をよく見ると、私はいろ／＼なものを發見する思ひをした。彼女の生命はある一點に向つて注ぎ集まらうとするものゝやうであつた。すべてのことはその一點に凝り、熱し、また凍り、そして他を顧みることも忘れ果てるものゝやうであつた。彼女には無邪氣な女らしささへ最早失はれて居るやうに見えた。

藤田君の話によるとイザンヌは二日ばかり晝室に姿を見せないで、その朝になつて何處からかほんやり歸つて來たとか。何處へ行つて來たともイザンヌが言はなければ、君の方でも聞きもしなかつた



といふことだつた。彼女はあの酒と言ふよりも樂に近いアシツシユの力を借りて、一時の人工的な樂園に浮かれることもあるが、酔がさめた後では餘計に沈んでしまふともいふ。「憐れな美しきイヅンヌ」と高村君はこの女のことを言つたが、こんな女の末は果して奈何なるだらう。旅に來ればいろいろな人を見るものだと思つた。

イヅンヌがモデル仲間のマアセルもあまり長くは藤田君の畫室に居なかつた。佛蘭西人と西班牙人の混血兒であるといふこのマアセルが、罎なしの帽子を冠り、三四寸もある踵高の靴を穿き、紅粉に饑と貧しさを隠して、『ロオトンド』の珈琲店あたりへ急がうとして居たのは、客でも探しに行くところであつたのだらう。何と言つても戦時だ。この悲惨で長く續く戦争のため職業を失ひつゝあるモデルはイヅンヌやマアセルばかりでないことが想像せられた。

## 百四

黄昏時もいくらか長くなつて來た。自分の旅窓から望まれる町の空にはほんやりとした夕月が懸るやうになつた。午後の七時ときまつて居る下宿の夕飯を済ました後で、私は月のある町を獨りで歩いて見た。獨逸飛行船の襲撃を受けてからは街燈の数も少く、人通りとても少かつたが、でもそここゝに散歩するもの、影は見えた。

春らしい晩だつた。斯うした月のある晩などは、私の胸に浮んで來る旅のあはれな話がある。話の主人公は英吉利の方に在留するといふある美術家だ。私は正宗君の畫室をフアルギエールに訪ねた時に、丁度倫敦から見えたといふ美術家と落合つて、その人から又聞きにその話を聞かされた。簡単に言へば知る人もすくない外國で、不自由した旅行者の話だ。尤も、助けたり助けられたりして互に長期の滞在を續けて行かうとするのは海外にある旅行者の常で、殊に戦時以來は故國との書信の往復にすら二ヶ月も要するほどもどかしい境涯にあるものが不自由するぐるはめづらしいことでもなかつた



が、その話の主人公は強いて他に迷惑を掛けるといふことも好まなかつた。獨りでそれを忍ぼうとした。そこで空腹のうちに數日を送つた。この絶食の人が食ふものも飲むものもない自分の周囲を見廻した時はふと晝室の隅に食鹽の残つて居るのに氣がついた。見ると、晝室の外には木の芽の青々としたのがあつたので、幾度か躊躇した後で、試みにその芽を摘んで來た。鹽で揉んだ生の木の芽は腹下しもしなかつたのみかいくらか、腹に應へもあつた。それに力を得て、芽を摘んで來ては饑を凌ぎ、するうちに、あらかたその木の枝にある青いものを摘み盡したばかりでなく、しまひには晝室の外に生えて居た青い草までも残らず摘んでしまつた。その乏しさの中へ國から爲替の届いた時の主人公の悦びはなかつたといふ。主人公は待ちわびた爲替を受取ると直ぐ料理店へと急いで、狂氣のやうに自己の空腹を満したともいふことである。私はこの話を思出す度に笑へなかつた。旅の不自由は既に幾度となく私のところへも襲つて來た。

『國を出る時に、金のことで困るやうにして來なかつた。』

と私は自分に言つて見ることもある。旅にある私を助けやうと言つて呉れた東京の友人の不慮

な災難、旅費の一部を割いて急場を救ふつもりで置いて來た國の方の知人の破産、斯う數へて來ると自分の留守中には思ひがけない種々な出來事が起つた。のみならず、國は遠くて通じかねる事情があり、兎角果され難い約束があつたりする。今日の日本に生れて筆執るものが、東京を離れて生活することの難さ。旅はつくづくそんなことを思はせた。

しかし、この旅のさびしさはもと／＼私が覺悟するところのものであらねばならなかつた。ひよつとすると神戸の港も見納めだ、その心から私は遠く國を離れて來たものだ。ある時は何か自分に適した職業をこの異郷に見つけやうとしたり、ある時はいつそ義勇軍の群にでも加はつて戦地の方へ出掛けようと思ひ立つたりしたこともあつた。そういふ度に私を引き留めやうとするのは、國の方に残して置いて來た母親のない子供等だつた。

旅苦は説くも詮ないことだ。しかしそのために私は山本君や正宗君などの骨の折れる外國生活を思ひやるやうに成つた。多くの友情の中でも、海外の旅で結びついた友情ほど無邪氣なものはあるまい。その意味から言へば、旅で懇意にするやうに成つた美術家仲間に対する私の心持は殆んど差別のつけ



られないやうなものであつた。唯、私が言ひしれぬ親しみを二三の人々に持つやうに成つたといふのは互に接する機会が多かつたといふばかりでなく、旅の空でそれ等の人達の骨の折れることを知つたからである。實際、山本君や正宗君やそれから高村君などがファルギエールの畫室での自炊生活に比べたら三度々々シモノエがつくつて呉れるリモオジュ風の田舎料理でも私には過ぎたくらるものだった。

## 百五

大使館を辭して歸國の途に上るといふ奥田君の出發は四月の末であつた。君は出發の前日にもファルギエールの方へ別れを惜みに來た。さういふ場合に、わざわざ私の下宿まで足を運んで牛肉の勦焼でもするからと誘ひに來て呉れるのは正宗君だつた。

すこし寒くはあるが春らしい雨の降る日のことであつた。夕方から、高村君に、奥田君に、私とが、ファルギエールにある正宗君の畫室に集つた。奥田君は大使館方面から筍だの慈姑だの、罐詰を持ち寄る。高村君は高村君でハムと赤茄子とを入れた手製のバター飯といふものを振舞はうといふ。主人役の正宗君が畫室の隅で牛肉などを切るのに、私も見ては居られないから、微雨のしと／＼振る中を町へ出て葱と石油とを買つて提けて來た。私達は書生の昔に歸つて、佛蘭西の葱の煮える香ひや、酌みかはす別れの葡萄酒などに、畫室の佗しさを忘れた。

「めづらしい話を聞かせやうか。」と言出すのは奥田君だ。「今度の戦争で、佛蘭西政府からわれ／＼の大使館へ火葬のことを尋ねによこした。日本には火葬といふことがあるさうだ、戦死した兵士を塹壕の方で葬るにはそれが一番よさそうだ」と言ふんだ。至急にその火葬の方法を取調べて呉れろと頼んで來た。佛蘭西はカトリックの國だね。死んだものは土葬にするといふことしか今迄こつちの人は知らなかつたのだね。」

こんな話を聞くにつけても、遠く國の方のことが思出される。



美術家の畫室には付きもの、やうなモデルがその晩も二人ほど招かれて來た。その中のマアセルは藤田君の畫室の方で私も既に見知り越しな女だ。『小さな可愛らしい人形』など、憶面もなくモデル達が人の噂をするのを聞けば、近く國から着いた年若な美術家のことだ。『あのイザンヌも可哀さうな女です、藤田さんはよくそれでも世話をなさる』などと云つて見せるモデルもある。斯うした人達を相手に笑ひ興する高村君の佛蘭西語も吹き出したくなるやうなものではあつたが、機轉のきく佛蘭西の女は名詞と形容詞だけ聞いた丈でも私達の言はうとすることを讀んだ。そればかりではない、モデル同志が互に話し合ふ佛蘭西語と、私達エトランゼエに話しかける佛蘭西語と、その間には可成な相違があつた。自分等の國の方で、外國人に話し聞かせる日本語が『てにをは』も何も省いてしまつて、異人に分り易く、分り易くと、言葉を碎いてあるやうに、丁度、そのモデル達が話し聞かせる佛蘭西語がそれだ。

『わたし、日本人、好きあります。』  
その調子だ。

しかし、この外國人扱ひも、それが言葉の不自由な私達に取つては、むしろ自然で旅らしかつた。奥田君は酒の上で私に享樂の必要を説いて、私の心を勵ますやうにして呉れた。過ぐる二年の旅の獨身生活は私を老衰せしめたかも知れなかつた。名残惜しげに私を勵まして呉れる奥田君の話を聞いて居ると、私はあのモオバツサンが "La vie est si long et si court," と云つた言葉などを思出して、何となく胸の塞がる心地もした。

その晩、私が奥田君と手を分つたのは夜の十時過ぎであつたと思ふ。私は正宗君の畫室を辭して、フアルギエールからモン・バルナツスの停車場へと歩き、それから天文臺の方角をさして歸つて行つた。いつの間にか微い雨も揚つて居た。巴里でこそ闇の中にはのかに白いのはマロニエだが、田舎はもつと花のさかりと思はせるやうな晩だつた。

『ボン・ソワ——ムツシユウ。』

ふと暗い並木のかげから來て聲を掛ける女があつた。古い『ノオトル・ダムの分院』の前のあたりを夜更けて歸つて行くと、こんな女に逢ふのは毎々で、さして私も氣に留めなかつた。巴里のやうな大



都會の夜から誘はれる暗い感じは、『夜の鳥』の多いことで、しかも陰氣な戦争の空氣は餘計にその影を暗くして見せた。貧しく饑に迫られたもの、空しい闇に泣くもの、それらはみな恐ろしい戦争が生んだものだらう。戦時以來、黒い喪服を着けて街頭にたゞすむやうな女すら顯はれて來た。

下宿に歸つてからも、歸國する人を送るといふ感じはまだ私から去らなかつた。私は雜誌の笥や慈姑を思出し、バター飯の香ひを思出し、奥田君の言葉を思出し、高村君や正宗君のわだかまりのない笑聲を思出し、モデルが歌つて聞かせて呉れたニスの『カーナブル』の祭の唄を思出した。

例の『ソクラテスの死』と題した銅版畫の古びた額は相變らず私の部屋の壁に掛つて居た。私はその下に獨り腰掛けて、旅に老いるといふことを悲しく思つた。どうかして私はエトランゼといふ特別な心は持ちたくなかつた。自分の國に居ると同じ氣分でこの異郷に暮したかつた。さういふ私には、又、この佛蘭西の旅に來てから、自分の内部まで入つて來るやうな一人の異性もなかつたのだ。しかし私は多くの無聊と、信じ難いほどの無刺激とを経験して見て、賢い河上君の細君が『人の買ふものは、あなたも買つていらつしやい。』と夫に言つたといふあの言葉に籠るあはれさを思つた。こんな旅

に來るものには、何事でも許せる。私はある同胞の旅行者が二年間の巴里滞在に、二十人の賣店の賣子を誘惑したといふ懺悔話を聞いたこともある。私は又、自分の眼の前で、血の出るかと思はれるやうな接吻を無理に佛蘭西の女に與へたある同胞の旅行者を見たこともある。それでも私は國の方で考へたほど野蠻にも思はずに、さういふ旅行者を許す氣になつた。それほど旅は私には寂しかつた。

“Nice est en folie,

C'est le soir du carnaval,

Les femmes jolies

Au bras des gailants se presse vers le bal——”

この『カーナブル』の祭の唄の文句は、正宗君の畫室の方で、無智なモデルの一人が紙の片に書いて見せて呉れたもので、言葉に間違ひが有るかも知れなかつたが、妙に私の旅情をそよつた。私はこんな唄を聞いて歸つて來て、

『どうかして生きたい。』

エトランゼ



と思ふ心を強く起すやうに成つた。のみならず、私はそのモデルが覺束ない佛蘭西文字で書き與へて呉れた文句の續きを辿つて、自分でも幾度となく口ずさんで見たほど、不思議な愛着をこんな土地の俗語に覺えた。

——Mais parmi les masques,

    passe un joli domino,

    Un pierrot fantasque

    Lui soupire ces quelques mots !

    C'est si doux d'écouter ce qu'il dit,

    Que la dame aussitôt le suit."

その晩は、正宗君の書室の方で馳走に成つた葡萄酒の酔が残つて、私も遅くまで獨りで起きて居た。たまに過すと、反つて寢られなかつた。

## 百六

シモネエの下宿にも私はあまり長く逗留し過ぎたと思ふやうになつた。この年とつて氣の短くなつた主婦の側に、マアガレットといふ姪の居た間は好かつた。リモオジュ以來馴染のマアガレットは感心に伯母さんの機嫌を取つたし、女の手一つで下宿を營業にする伯母さんの手傳ひとしても好く働いて行つた。何かシモネエの氣に逆つたことでもあつたかして、ひどく叱られたり、手の甲を打たれたりして泣き／＼過失を詫びて居たマアガレットを唯の一度私も見かけたに過ぎないくらゐだつた。あの主婦の姪がリモオジュの郷里の方へ歸つて行つてからは、おそろしく氣のきかない下女が私達の下宿へ雁はれて來た。マアセルと言つて、藤田君や正宗君の書室の方で見たモデルの一人と同じ名の女だ。巴里あたりに奉公する佛蘭西の女の中には、自分の名も書けないほど無教育なものめづらしくなかつたが、マアセルもその一人で、それにこの女の無精で強情なことが日頃働き好きなシモネエを



怒らしてばかり居た。私が部屋に籠つて机にでも對つて居ると、主婦が下女を相手に毎日言ひ争ふ聲は臺所の方から響き傳はつて来て、しまひには煩はしいほど耳についた。

『マアセル——マアセル——』

それを聞く度に私は『又か』と思ふやうになつた。

どうかすると下女が脹れた顔付で私の部屋の窓硝子などを拭きに来ると、シモネエも不快らしい顔付でそこまで小言を言ひに来ることがあつた。

『マアセル——マアセル——』

その聲は私の部屋の内でも起つた。主婦は下女が拭きかけて居る窓硝子の方へ行つたり、蓋のしてある暖爐の前に立つて見たりして、そこにもこゝにも掃除の行き届かないことを下女に指して見せた。

『あれもお前の落度だ、これもお前の落度だ、』と責めても責めても責め足りないやうに言ふシモネエの側には主婦の機嫌を取ることも知らないやうなマアセルがほんやり立つて居た。

マアセルが臺所の方へ何か取りに行つて居ない時に、私はシモネエにむかつて言つて見たこともあつ

た。

『なかく、奉公人を使ふのは、むつかしい。さう、おかみさんのやうに叱つたから、動くといふものでもないでせう。』

斯ういふ場合に應答する時のシモネエは、自分等の國の方の婦人とは大分違つたところを見せた。下宿する客としての私に對しても、言ふだけのことを言はなければ承知しなかつた。

『いえ、あのマアセルは仕方のないものです。いくら私が言つて聞かせても解らないやうな馬鹿者です。』

『でも、マアセルは使はれる人、おかみさんは使ふ人ぢやありませんか。』

『あなたはマアセルの最願ばかりなさる。あんなマアセルのやうな下女を使ふには、餘程殿しく言はなければ駄目ですよ。』

シモネエはその『餘程殿しく』に力を入れて見せて、肩を揺つた。

私も言葉は不自由だから、今少し精く自分の感情を言ひあらはしたいと思ふやうな場合には、いつで



も言葉で詰まつてしまつた。

『どうして奉公人は、こつちが使はれるくらゐにしなければ、動くものですか。』  
 と言はうとして見たが、それを思ふやうに言ひ得ないで、口をつぐんでしまつた。

こんなこしが有る度に、私は同じ下宿にあまり長く落着き過ぎたと思はないではなかつた。私はこの長い戦争が小さな下宿を營む婦人の生活にまで直接に影響することをも知つて居た。開戦以來のシモネエはなんとなく急に年とつたやうにも思はれた。眼に見えない戦時の心勞はこの婦人をも耐へ情のないものにした。そう思つて見ると、むしろ私はシモネエを憐む氣にもなつた。細い筆をたよりに旅を続けやうとする私のやうなものにとつては、成るべく巴里の宿所を變へたくない心があり、どうせこの下宿を他に置きかへて見たところで似たり寄つたりだと思ふやうな心もあつた。

この佻しさを凌いで行かうとする私は、どうかすると思ひも寄らない言葉を懇意な美術家の口から聞くこともあつた。私のやうに下宿も取りかへずに、一つとところにちつと動かずに居るには、何かそこに理由があらうと言ふにあるらしい。

山本君は私を見に来たついでに、例の卒直と心易だてとから、私にむかつて切出したこともあつた。

『あなたは、この下宿のおみさんと怪しいんじゃないやありませんか。』

それを聞くと私も吹き出してしまつた。私が自分の位置を十分に説明しないかぎり、さう言つて山本君が尋ねるのは無理もなかつたかも知れない。しかし山本君にそんなことを言はれるのは、他の人に言はれるにも勝つて、私には、切なかつた。

やがて五月の朔日が来た。鈴蘭のことを『ミユゲエ』の花と呼んで、それを幸福の象徴のやうに人々の胸の上に挿す佳例の日が来た。その年は氣候もおくれ勝と見え、町々の男や女の祝ふものも蕾は小さかつた。

『どうです、おそろしいものぢやありませんか。』とその日の夕方に、シモネエは食堂に居て私にブランシットのことを語り聞かせた。『あなたなどはお信じなさらないかも知れませんが、ちやんと豫言が出ましたよ。五月の一日には必ず好いことがある、その好いことを亡くなつたお父さんが私に授けて下さる——それがブランシットの上につきり顯れましたよ。』



この主婦が日頃迷信に近いまでに大騒ぎして居るブランシエツトは一頃自分等の國の方でも流行した『コックリさま』だ。三本の脚から成る占ひの道具だ。羅馬舊教の熱心な信徒で、日曜毎の寺院通ひを休んだこともなく、娘の時にはバルザックを愛讀したといふ程のシモネエにも、こんな半面があつた。シモネエはそれに理屈をつけて、一種の靈感主義とも呼んで居た。私はまたこの主婦が何を言出すのかと思つた。

『あの豫言に間違ひはない。さう思つて待つて居りましたら、どうでせう。新規な日本の方がお出下さいましたよ。』

シモネエは下宿の主婦らしいことを言つて、私を笑はせた。彼女が新規な日本の方と言つて見せたのは河田君の紹介でシモネエへ投宿した熊本高等學校の戸澤君だ。戸澤君は夕方に英國の方から着いた。その日から私も好い話相手を得た。戸澤君は長い倫敦生活の香ひを巴里まで持つて来て、それを私に分けて呉れるやうな人だつた。曾て私が河田君を案内したルキサンブルの公園の方へ、今また戸澤君を案内して行くことを楽しみにした。燕子花に似たイリス、それからチュヴリップなどの花園のある

元老院前あたりから、二人して公園を歩き廻ると、行く先にある樹木の若葉で私などの名も知らないものが直ぐに君の眼に映つた。楡、山査子、赤い葉の山毛榉——君はさういふものを言ひ當てるほど樹木のことにも明るかつた。

『マロニエは橡ですぜ』

と戸澤君は私に教へて呉れたが、さういふ君の智識は倫敦の公園の方をよく歩き廻つて樹木を識別するやうになつたといふ長い外國生活を語つて居た。

最早プラタアヌの花の落ちる季節になつた。あの黄ばんだ無数の花は公園の道にも落ち、私達が下宿のある並木街の路にも落ちた。私が朝に晩に行く部屋の窓も、プラタアヌの若葉に映つて青々として来た。私には忘れられない五月二十日——初めて私がマルセエユの港の方から巴里に入つた日——その日にもう一度近づきつゝあつた。

不思議なことが私の夢に入るやうに成つた。そんな夢を見たことは、おそらくこの佛蘭西へ来てからも、めつたにない。それは五月の陽氣とも思はれないやうな、逆戻りのした感じのする日のことで、



寒い雨が窓の外に見えるプラタマの青葉を流れた。私も長い旅に疲れて、午後から寢臺の上に横になつて居た。すこし風邪心地でもあつた。何時の間にか私は國の方の古い寺院の境内を歩いて居た。廣い寺院の境内には借家がある。そんなことも巴里あたりの寺院には見られない圖だ。さう思つて、めづらしく久しぶりに國の方の土を踏んで居ると、多勢の子供が私の周圍に集まつて來た。ところがその子供は佛蘭西の子供だ。あるものは私の側を馳け抜けるやうにして私の顔を覗きに來る。あるものはめづらしさうに私の後から附いて來る。何故、そんなにめづらしがられるかと言へば、私が和服を着て町を歩いて居るからであつた。曾てそれらの子供の見たことのない純粹な日本の風俗をして居るからであつた。

眼がさめて見ると、私は矢張國から遠い異郷の客舎に居た。やがてもう足掛三年にも成る旅の末にはこんな夢を見た。國の方にあるものと、この佛蘭西にあるものとでそれほど混り合つて、その混淆から起つて來る不思議な心持は眼がさめた後まで容易に私から離れなかつた。何となく國も遠くなつたやうな氣がした。

河上、河田二君の歸朝を送る。

"Viva il Re! Viva L'Italia" 斯う云ふ羅馬市民の熱狂した聲を巴里の客舎にあつても想像で聞くことの出来るやうな、パントコオトの祭(羅馬舊教の聖靈降臨祭)の日の前後の旅の心持から、斯の手紙を書き始めます。

いよいよ伊太利の議會はサンドラ内閣を助けて國々の運命を決せんが爲に協賛を與へた、この新しい報知が巴里に傳はつたのは五月二十日の夕方でした。私は下宿に居てそれを夕飯の時に知りました。ボルドオ生れの佛蘭西人でヴァル・ド・グラスの陸軍病院へ通ふ少壯な眼科醫がその報知を宿の食堂へ持つて來ました。河田君の宿泊された部屋には今はこの眼科醫のボンフォンヌ君と、ボルドオから夫



を慕つて逢ひに來た若い細君とが居ます。河上君が、ボオル・ロワイアルの旅館から食事によく通つて來られたころの食堂には、今は遞信省の村上君、工學士密田君、佛蘭西人側では眼科醫夫婦、それからある家庭へ教へに通ふ年とつたガルノオ嬢などの顔觸れです。私共は三週間ばかり前から今日あることを豫期して居りました。最近に伊太利を旅行して歸つた法學士森君から、エニスあたりは巴里と同じやうに美術館も閉ぢられ、國寶の美術は安全な場所に移され、到る所の停車場には警衛の兵士が立ち、見送り見送らるゝ兵士等の停車場を出發する光景は、殆んど戦時に異ならなかつたといふ話を聞いた時に、既に伊太利の開戦を豫期しました。しかし、この豫想が愈々實現された五月二十日の夕方には、今更の様に活きた歴史そのものゝ中に立つて、急奔する時代の潮流を觀望する思ひでした。その晩、巴里の「オペラ、コミイク」ではソアレエを催して居たとのことです。演技の終り近く、一人の俳優が舞臺の上に進み出て、伊太利よりの報知を披露したとのことです。見物一同の喝采の聲はしばらくあの芝居小屋を動かしたとのことです。斯ういふ記事を私は翌日の新聞で讀みました。『吾等の力は一致してある。吾等の心胸は一つのごとくに打つ。同心合致の意志をもつて吾等は目ざす標的へ』

と進みつゝある。吾等の心胸の力は、伊太利の陸軍と、海軍と、及び吾等の新しい歴史の運命への成就へと諸軍人を導くべき偉大なる主腦者とに於いて、その無雙勇敢なる又潑刺たる表現を見出すであらう。Viva il Re! Viva l'Italia!』斯ういふ言葉でその演説が結んであつた事を讀みました。それが議事堂でサンドラの口唇から落ちた時は、議員、傍聴者、乃至は新聞記者席に詰めかけた記者等によつて發せられた雷のやうな賞讃の聲が耳も聳ふるばかりであつたとの記事を讀みました。私は歐羅巴戦争の大きな舞臺が南はアドリアチック海の沿岸にまで擴大せられたことを想像し、狂せるごとき伊太利人の示威運動は巴里に於ける動員當時の比でないことを想像し、その數萬の群集の動く熱い南歐の日あたりを想像し、昨年八月あたり河田君と共に巴里で送つた日のことなどを胸に浮べて、獨り斯の容舎に留まるの思ひを深くしながら、バンコオトの祭を迎へました。

河上君は既に京都大學の教室の方で講義にいそがしい頃かと思ひます。後れて倫敦を出發された河田君も今は京都の方で朝晩に顔を合せらるゝ頃でせう。君等の歸朝を送るといふには斯の手紙は甚だ後れ馳せの感があります。唯、私は、互に異郷の心づかひを分ち食卓を共にした君等に宛て、これを書



きたいと思ふのです。自分の旅の心を寄せたいと思ふのです。

## 百八

手紙の二。

パントコオトの祭の日は丁度五月廿三日の日曜に當りました。羅馬舊教の宗教的季節といふだけで、取立て、言ふほどの祭でもありませんが、私に取つては妙に忘れ難い日でした。一昨年、私が初めて巴里に着いたのも矢張り五月の二十三日でしたから。まる二年も故郷を見ずに暮した。斯の心持を深くするものは、最早君等が居ない後で自分獨りの耳目に觸るゝ事柄より引起さるる感覚です。眼前に青くなつた並木の若葉です。獨り見る巴里の五月の日光です。君等が歐羅巴を去つた後でもまだ戦争の續いて居ることです。伊太利宣戰のことを書き立て、デルカッセの外交の成功を祝する新聞を買ふこ

とです。「悲觀主義の死」と題したモオリス、パレスの鼓舞的な論文を読むことです。あの祭の日には、赤十字の章のついた壺を提げ伊太利國旗の胸飾りや圓い銀色のメダルを賣りつける娘達が、右にも左にも私の眼前を往きかひました。伊太利の起つたことが何程斯の事局を左右するかは知りませんが、前にも申し上げましたやうにあの伊太利の群集の激昂した叫喚を私は想像で聞くことが出来るやうに思ひました。羅馬よりの報知はダモンチオのことを屢傳へました。あの伊太利の詩人が羅馬へ入つた時は數萬の群集に迎へられ、愛國的の演説を試み、衆と共に伊太利の萬歳、國王の萬歳を絶叫したとありました。彼は國王に謁見した。彼は行く先で群集に圍繞せられた。彼は巴里にあるモオリス、パレスに宛て、ラテン民族の同盟を誓つた長文の電報を打つてよこした。彼はまた伊太利の海軍に身を投じて戦ひに赴くこともありました。兎に角、その行動は華やかな戯曲家たるを失ひません。河上君に巴里で別れたのは昨年の春でした。歐羅巴に滞在中、もう一度互に逢ひたいものだ、もし互の事情が許すなら白耳義のブラッセルか或は倫敦かで落合ひたいものだ、と約束したことも戦争の騒ぎやら何やらで果せなかつたのは残念です。「スエズを經由して日本へ歸ります」といふ君からの葉書を受取



つた時は、君は既に倫敦から歸朝の途に就かれた人で、竹田君と一緒にあの白土まじりの崖に地中海の波の打寄せるマルセユ附近の沿岸を甲板の上から振返つて見て行かると思ひました。君は遠く歸つて行く旅で、私はまだ残つて居る旅です。私はこの客舎で君の航海を想像しました。スエズをもう一度通つて見るといふことは奈何でした。ある人の言ふやうに同じ旅程を繰返すに過ぎないでせうか。往きと還り、それは殆ど別の旅だと言つても可いほど印象の違つたものがあるではないでせうか。歐羅巴を見た眼で亞細亞、阿弗利加を見直し、歐羅巴人の生活を見た眼で彼等の殖民地を見直すといふことも、思ひ當るふし／＼が多いでせう。漠然とした不安や、驚奇やは減する迄も、より豊かな旅の感覺の働きは反つて還りの航海の方に多からうと思ひます。私は佛蘭西ノエルでやつて來た爲にヂユブテイを知つてベナンの港を知りませんが、再び君の眼に映じたあの熱帶的な地方の色彩は奈何でした。印度洋は奈何でした。あの恐ろしい永遠の夏は奈何でした。コロンボ、新嘉坡、其他の東洋の港々は奈何でした。西洋へ來てます／＼日本を愛するやうに成つたと言はれる君が、再び母國を見得た日の心持は奈何でした。長期の航海をする船乗などが陸に餓ゑる激しさは土に接吻したいと思

ふほどのものであるとか。君が母國に辿り着いた時の心持は、あるひはそれに似た懐かしさであつたでせうか。斯の手紙を書きかけましたら、河田君から葉書で、最早疾くに歸朝されたこと、思つて居た君が倫敦出發以來七十日を費し、亞米利加を經由して漸く横濱に安着されたことを知りました。

## 百九

手紙の三。

巴里に見るべきもの、少い時は今です。あらゆるミユゼエを始め、パンテオンの扉も閉され、番人は去り、一切美術庫に堅く錠のおろしてあることは河田君が當地を去られた頃そのまゝの有様です。セエヌ河の岸にあるあの大きな見世物小屋のマヂック、シテイ迄今は軍用の假倉庫に宛てゝあります。羅旬區に古いビュリエー(往時バルザックなどの遊んだといふ)あの舞踏場には一度河上君や竹田君



を御誘ひしたことも有りましたが、あそこ今では兵士の被服を入れる假倉庫です。斯る時に來て斯の都の春を訪ふものは、僅かにナポレオンの墳墓の境内に今度の戦争の分捕品を見、ブツチイ、バレエの恤兵的展覽會にランスの寺院其他戦禍を蒙つた場所から移された古い裝飾美術品の名残を忍ぶといふに過ぎません。先頃、熊本高等學校の戸澤君は英吉利から歸朝の途次巴里に立寄られ、河田君よりの紹介でこの宿に一週間あまり滞在されました。戸澤君はこの町の外廓を見るのみに満足したと言はれましたが、ほんとに御話すべきほどの何等の催しも無い時です。劇のマチネエも言ふに足りません。戸澤君がマルセユに向けて出發された後、私は人に誘はれて「オデオン劇場」にマチネエを見ました。そこではモリエールの喜劇のある舞臺面と、老優ムネスリの素顔といふものを見たに過ぎませんでした。

ルキサンブルの美術館の一部には今、現代白耳義派の繪畫展覽會が開催中です。是とても左様大したものでは有りません。四十枚や五十枚の製作を陳列したとて到底現代の白耳義派を盡すことは出來ないが、とカカロオグにも斷つては有りませんが、ヅルアーレンやメーテルリンクのやうな詩人を産んだ國の繪畫としては物足りないものでした。唯、斯ういふ戦時に際して特に白耳義の爲ルキサンブル美術館の一部を公開し、その現代の美術家を紹介し、單に戰場に於いて兵士等の握手をかはすといふのみでなく、藝術を通して同盟國民の親しみを計らうとする佛蘭西當局者の襟度は羨むべきものと思ひます。ロダンが英國に彫刻を寄附した例にならひ、英國の畫家ブランギムは多數の板畫をルキサンブルの美術館に寄附して來ました。それが館内の一室に並べてあります。英吉利風の根氣で出來た板畫といふことを思はせるのみではありませんが。ヱトイユの田舎の方へ畫作に行つて居る正宗君が見えた日、私は連立つて復たあの美術館の入口の石段を上つて見ました。あの磨硝子を按排した天井の下、モザイクで出來た床の上は、まだ君等の記憶に新しくあるでせう。佛蘭西印象派の繪畫の掛つて居た白耳義派の作品と掛け替つて居ます。私が巴里へ來て、初めてピサロオやセザンヌの作品の前に立つて見たのも、あの部屋でした。正直なと言つても正直な、そして何處か憂鬱な心の影のある畫が、是がピサロオか。澁い、深い、冷い、恐ろしい、ちつと物を強く見入つたやうな畫が、是がセザンヌか。左様初めて思つたのもあの部屋でした。



マネの『バルコン』、モネの『海』、ルノアールの『讀書』、其他の繪畫が今は悉く取除してあります。あの寶石の光を見るやうなドガの踊り子の畫のあつた壁の側には、今はムニエールの彫刻が置いてあります。狭いといふ非難はあるかも知れませんがそのかはり可厭に成るやうな覇氣も無い、『勞働』をよく題材としたあの彫刻家は、白耳義人だといふことが斯の催しで分りました。英吉利派の繪畫の掛つて居た部屋へも行きました。その中央にあつたワッツの『生と愛』、それからあの壁の側にあつたバアン・ジョンスのラファエル前派風な素描の女の顔も、白耳義派の作品に掛け替はつて居ました。そこにある多くの作品は寫實的で、そして一體に陰氣なものです。河田君はシャヴンヌの『貧しき漁夫』と『希望』のあつた廣い部屋を記憶されるでせう。ブランギムの板畫は今あそこを全部占めて居ます。斯の展覽會で心を引くのは、ロダンの彫刻が非常に多數に見らるゝことです。以前には陳列してなかつた銅の胸像なども多く出してあります、ロダンの製作のある時期を語つて居るやうな、むしろ繊巧に近いほどの柔かみのある、極めて寫實的な大理石の彫刻も出してあります。それらを見て行くと、あの彫刻家を好むと好まないとに關らず佛蘭西の美術家らしいすぐれた感覺と、驚ろくべく鋭敏な神

經質とを感ぜずには居られません。同時に、移り動きつゝある今の藝術の世界にあつて、最早既に過去の人となり或は生き残つて居る畫家、彫刻家、詩人、小説家などのある一時代を代表する群の中の最後の人の一人だといふことをも思はずには居られません。

## 百十

手紙の四。

すこし障ることがあつて斯の手紙は書き後れました。御許し下さい。實は私は斯の御便りの中で、君等に御別れしてから後の自分の旅の感想などを種々御話して見たいと思つたのですが、こゝには君等を送る心を寄せるに止めます。亞米利加の方から當地にやつて來る同胞に逢つて見る度に、あの生存競争の激しい殖民地の精力主義（もしくは實用主義）といふことに就いても考へます。事實吾儕が日



本の方で先づ受納れたものは、西洋の教育と言つてもその實亞米利加の教育であり、西洋の宗教と言つてもその實亞米利加の宗教であり、明治初年のデモクラシーの思想、それらは皆な亞米利加から學んだところのものであることを考へます。その點から言つても、私は好い意味にも悪い意味にも近代的な亞米利加を通しての河田君が歸朝の旅を想像しました。

河上君が當地に滞在中は、君に、竹田君に、東北大學の石原君に、私とで、夜遅くまでよく話しました。東洋の果からやつて來た旅客同志が互ひに異郷の客舎に集つて見た時は、期せずして私共の話は故國を奈何せんといふやうな題目によく落ちて行きました。濛々と大河の流れるやうな共同享樂の歐羅巴的生活を眼のあたりに見、顧みて社會的生活の不調和と貧弱とに苦しむ故國の現狀に想ひ到る時は、枕を高くして眠ることの出来ないやうな氣も致しました。私共は互に氣質を異にし、志すところを異にして居ました。でも年齢も忘れ、専門の違いをも忘れ、再び斯様な風に國の方で集つて話す機會があらうかと思はるゝほど互ひの心持を比べ合ひました。是も斯うした旅の賜物かと存じます。私は自分の部屋の窓へ行きます。そこから河上君の泊つて居たあのボオル・ロワイアルの旅館の窓を

今も望みます。當地も今では青葉の都です。窓外のプラタマは私の眼を遮るほど茂り重なつて居ます。私は斯の宿を出て、樹蔭の靜かな天文臺の附近を歩き廻ります。河田君が當地に滞在中、君とよく一緒に散歩したあの天文臺の裏手からアルゴオの通りの並木の續いたあたりダンフェル・ロシユルユウの廣場に立つ國防記念の巨大な獅子の銅像の望まれるあたりを今も歩き廻ります。

斯の町の界限は今君等の眼に浮ぶでせうか。往昔、伊太利の詩人ダンテが巴里に遊び、今のソルボンヌのまだ神學や哲學の學校であつた時代に學んだことのあると言はるゝあの大學の建物の一角に遺つた禮拜堂等は、今も君等の眼に浮ぶでせうか。斯の都にある歴史の尊重、藝術の尊重、學問の尊重は恐らく君等に取つても想像以上ではなかつたでせうか。

巴里　ボオル・ロワイアルの町にて



### エトランゼエの後に

長々と私も書きつづけた。私の佛蘭西の旅はまだそれから一年も続いたが、こゝまで書いて来るうちに、ばつたり私の筆は止まつてしまつた。行けば行くほど私の旅の心は深かつた。その心が深ければ深いほど、到底何もかもこゝには盡せない。思ふに私はもうこゝらで筆を擱いて、黙すべき時が来たのだらう。

初めて西歐羅巴の土を踏んで見た時の私は四十二歳であつた。どうしてこんなことをこゝに書き添へるかといふに、私が旅の空でめぐりあつた同胞のたれかれは、いづれも私より年若な元氣な人達ばかりで、ほとく私は自分と同年配の旅行者に行き逢ふことがなかつた。唯一人、瑞西ベルンの方から戦争を避けて歸國の途次巴里に一週聞ばかり滞在した耳鼻科専攻のドクトル佐藤君だけが、私と同年



か、あるひは一つも年長かと思はるゝぐらゐの旅行者であつた。この事は私の佛蘭西の旅には大分關係があつたと思ふ。おそらく私は多年の改めがたい習慣を自分と一緒に多分に持つて行つたのだらう。その私が、何と言つても根本に於いて東洋人である私が西歐羅巴の社會の空氣の中に身を置いて見た時は、周圍の生活と自分との均齊を見つけるといふことにすら骨が折れた。多くの旅行者が夢みる身の幸福な諧調——それは北歐羅巴から巴里に來る人達すら容易に見つけがたいのを常とする。まして私のやうに東洋の果から出掛けて行つた旅行者のことだ。長いこと私は旅そのものを仕事として暮した。ある時は、こんな骨折が實際何の役に立つだらうとさへ思つたことがあつた。

さういふ私も、旅で二年ほど暮すうちには比較的自由に振舞ひ得るやうな何となく廣々としたところへ出た。私は靜座して暮す生活から腰掛けて暮す生活に移り、腰掛けて暮す生活から立つて居ても暮せる旅行者らしい生活に移つた。その頃の私は、咽喉が乾いて飲むものが欲しければ、天文臺前の廣場の角あたりにある小さな珈琲店で、立ちながら熱い珈琲にありつける帳場の側でも事が足りた。歩きたぶれて休む場所が欲しければ、ボオル・ロワイアルの通りの並木の間置いてある共同腰掛で

も事が足りた。世界を家とする旅行者の心は漸くその頃から私の上にもひらけかゝつて來た。

「旅の空にあつて送つたり迎へたりした諸君の消息をもう少しこゝに書きつけようと思ひます。安井、柚木、藤川の三君が前後して巴里を去つてから、當地に在留する美術家諸君の會合もやゝ寂しく成りました。倫敦から歸朝の途次立寄られた岡見君、慶應義塾の三邊君、長崎高等商業學校の武藤君などはいづれもマルセエユへ向ひ、ルウ・ベゾンの長谷川君も長い畫室住居を出て近く歸朝の旅に上らうとして居ます。巴里の大使館を辭した奥田君は今家族と共にスエス經由の甲板の上でせう。伊太利の旅からこゝへ歸つて來た人には萱野君があります。瑞西へ向はうとして居る人には京都大學の野上君があります。こゝしばらくの間に、随分種々な方面からの旅の話の話を聞きました。遠い雲の往來にも譬へだいは、全く吾儕異郷の旅行者です。吾儕は直ぐ懇意にも成るのです。そのかはり又、容易に離れてしまはぬば成らないやうな時も來るのです。そして一旦手を分つた上で斯の交際を持続すること



もなか／＼困難なのです。同胞の愛情と、不可抗な旅愁と、信じ難いほどの無刺戟とが、實に吾儕を十年の友のごとくに結び着けるのですから。〔自著「佛蘭西だより」より〕

國を出た頃から數へると足掛三年目の六月の末あたりには、私は相變らず産科病院前のシモネエの下宿に居て、こんないろいろな諸君を送つたり迎へたりした。

通信省の村上君、工學士密田君、それから慈惠院の綿貫君、其他の諸君が私の下宿の食堂に集まつたのも、その頃であつたと思ふ。密田君は亞米利加から、綿貫君は獨逸から、いづれも長期の留學を終つて歸朝の途次巴里に立寄つた人達であつた。寄るとさはると私達には國の方の言葉を出して各自の旅の心を比べ合つたが、村上君の佛蘭西最願、密田君の亞米利加最願、綿貫君の獨逸最願で、私達の食卓には時ならぬ議論の花がよく咲いた。

獨逸軍によつて占領されて居た白耳義もしくは佛蘭西國境の地方から傳はつて來る婦性の蹂躪に就いて、私が佛蘭西だよりの一節を國の方へ書き送つたのも、その頃だ。獨逸兵を父とし、汚辱された佛蘭西の婦人を母としての無數な私生兒のことでは、私達の食堂でもよくその話が出た。戦地にあつて

は、墮胎は許さるべきや。悲惨な問題ではなかつたらうか。ほんとか嘘か知らないが、戦地の方では佛蘭西の子供の虐殺が獨逸軍によつて行はれるといふ恐ろしい噂も傳はつて來て居た。佛蘭西の男の兒と見たら殺せ、芽生のうちから敵の復讐を防げ、こんなことが獨逸側の軍人の間に言はれたり行はれたりして居るとは一寸私には信じられなかつた。

『君等は民族としての戦ひを戦つたことがあるか。君等の日露戦争も、要するに經濟のための戦ひではなかつたか』

斯ういふことを私に言つて見せるのは、同じ食堂で毎日顔を合せた眼科醫のボンフォンヌ君であつた。さういふボンフォンヌ君もやがて私達の食卓を去り、綿貫君や密田君も前後して歸國の途に上るやうになつても、まだ戦争は續いて居た。そして、婦人から子供までの戦争のやうな斯の恐ろしい出來事が、歴史あつて以來の斯の大きな戦争が、何時果てるとも知れなかつた。



巴里も六月の末となる頃には、燕子花に似たイリイヌや、鬱金香の花の季節も既に過ぎ去る。一切のもの、競ひ合ふ青春が過ぎ去るやうに、それらの花のさかりも過ぎ去る。オイエー、ミモサも色褪せ、新婚の誇りを見せた生氣ある紅い薔薇と、生先長い處女の身にコムミュニオンの白衣を着けたやうな白い百合とが、高い香氣を放つ時が来る。莓と櫻實の熟したのが籠に盛られて町の水菓子屋の店頭に出してあるのもその頃だ。街路に茂るブラタヌは言ふまでもなく、公園の山毛榉、楡、山査子、其他の樹木の新葉がさかんに初夏の生氣を呼吸するのもその頃だ。

戦時とは言ひながら、その季節が来ると、私はルキサンブル公園内にある薔薇園を訪ねるのを楽しみにした。そこはルキサンブル美術館の赤煉瓦の裏手にあたるところで、何時の間にか私に取つては巴里での最も好きな場所の一つとなつた。よく私はさう思つた。もしこの旅を無事に終ることが出来て巴里に別れを告げて行く日が来たら、一番最後に私の足の向くところはルキサンブルの薔薇園であらうと。あの花園も忘れがたい。

「町へ出て往來の人に混りたいと思ふやうな夕方 came ました。私はあの漂泊の一生を送つた芭蕉のことなぞを胸に浮べて見て、自分の旅の心をさかんにしようと思つたのです。私は又、「これ泊りぢやないかえ、泊りなら泊らんせ」といふ文句で始めてある近松が戯曲中の夕方の描寫などを胸に浮べて見て、自分のエキゾチズムをそゝらうと思つたのです。各自の生活に戦争の浸潤して行く光景は、必ずしも黒い喪服の婦人ばかりでなく、私はそれを夕方の町で見つける奈何なる人の姿にも讀むことが出来るやうに思ひました。葡萄酒の罍を抱いて自分の前を通る少年にも、汚れた顔の子供にも、荷馬車に石炭を積んで巨大な男を驅つて行く男にも、子供の手を引き腰掛椅子を小脇にかゝへながら公園の方から歸つて来る乳母にも、烏打帽子を冠つた年若な労働者にも、小犬を連れたお婆さんにも、「ラ・リベルテ」とか「ラ・ブレス」とか呼んで来る夕刊賣にも、赤い花や櫻實の飾りのついた帽子を冠り莫迦に踵の隆い靴をはき人の眼につく風俗をして其日の糧を探し顔な婦人にも」(佛蘭西だより)これが長期の旅に揉まれた自分を例の『シモンヌの家』の前あたりに見つけた私だつた。

外國にある一切のものが旅行者として自分等の方へ侵入して来る力には、驚かれる。長い冬を二度も



越すうちには、朝晩の部屋衣として居た和服の綿入の裾も切れ、襦袢の裏からは白い綿がはみだすやうに成つたが、それを仕立直すといふ方法もなかつた。私は自墮落にも成つて、朝は顔も洗はずに飲む珈琲の味を覚え、どうかすると編上げの靴の紐も解かずにそのまゝ寝臺の上で晝寝をした。こんなことは國に居る頃には知らなかつたことだ。旅に疲れて見る國の方の夢ほど、この私達を象徴的な位置に立たせるものはない。私は忘れがたい夢の一つをこゝに書き添へたい。その夢に入つて来た人の誰であるかは判然と記憶にも残らなかつたが、國の方の女の人であることだけは確かだつた。ところが、その人は日本の婦人に似てもつかない眸の色をして居て、旅で見慣れた婦人達の眸のやうに青かつたことを覚えて居る。行き盡した異郷の旅の末には、こんな夢を見るものかと思つた。

「旅の袍の中に「芭蕉全集」を入れて参りました。斯うした客舎で「奥の細道」などを讀んで見ることは、それが自分に不思議な力と暗示とを與へて呉れるばかりでなく、又國の言葉の有難味を味ふといふばかりでなく、自分等の國の方のことゝ當地にあるものとを比較して見る便宜にも成るのです。私は自分で自分に問ひました。芭蕉の書いたものには無常迅速といふことがある。幻住といふことが

ある。それから起る哀み、敬虔な気分などがあらはれて居る。一體東京の方で自分等の無常觀をそゝるやうな外界の現象が矢張こゝにも有るだらうかと。こゝには四季の風物が實に靜かに推し移ります。故栗本勳雲翁が「曉窓追録」中に所謂「秋度、雁を聞かず、春燕來らず」です。町の並木は森のやうに茂つても蟬一つ鳴くのを聞きません。蝶もめつたに來ません。螢も見かけません。夜明方に鴉が鳴いて通り、日の輝いた町の空に蜻蛉が群れ飛ぶやうな光景は、こゝには見られません。あらゆる秋の悲みをあつめたやうな蟋蟀の歌が縁の下の方から通つて來るなども、この石づくめの町には無いことです。こゝには強い線があります。硬い質があります。垣根や葡萄棚のやうなものまで鐵製です。一切が實に巖固で永久的です。人の心を傷み易くさせるもの、センチメンタルにさせるもの、あるひは深くも淺くも無常觀をそゝるやうなもの、さういふ外界の現象がどうもこゝには少いやうな氣がします。(佛蘭西だより)

私はよく自分の部屋の窓の近くへ芭蕉の全集を持つて行つて、風の入る涼しいところであの夏の部なぞを讀んで見た。ボオル・ロワイアルの石の町へも遽かに暑氣が訪れて來れば、短か夜といふ感じの



する晩も多かつた。私は獨り窓のところで『月はあれど留守のやうなり須磨の夏』といふ芭蕉の句なぞを口ずさんで見つて、旅を栖家とするものゝ苦しみと、あの句に籠る深い空虚とを味つた。

その後旅の道連れのことを少し書き添へて、この稿を終りたい気がする。同じ年の十月には、高村、森田、山本、正宗、青山の諸君がリオンを指して出掛けた。これはファルギエールの畫室の方に集まつて居た美術家仲間の殆ど全部が巴里から動いたにもひとしかつた。その中で高村君だけは十一月の末に引返して來た。あのリオンの美術館にあるといふモノの『波』、カリエーリの『貧しい女』の肖像其他の模寫を携へて巴里へ歸つた高村君が、もう一度私を見に来て呉れた時のさも草臥れたらしい顔付を私は忘れることが出来ない。その十一月には森田君もリオンから歸つて來て歸國の支度を始める人であつたし、逡信省の村上君も既に巴里には居なかつたと思ふ。

ソルボンヌ大學に近いセレクト・ホテルは村上君や鶴峯君の宿泊したところで、そこには日本人がよく集まつた。以太利の旅を終へて再度巴里へ立寄つた澤木君、同じ慶應の小泉君、小林君、それから阿部君などは、いづれもそこに投宿した人達だ。

『どうだね、歐羅巴へ來てから、すこしはエラくなつたかね。』

『む、すこしはエラくなつたやうな気がするね。』

こんな會話がセレクト・ホテルの一室で、あのソルボンヌの古い禮拜堂から時を知らせる鐘の音が近く聞えて來るところで、長期の留學を終りかけた舊友同士の間にはされるのも、旅らしかつた。それを笑ひながら尋ねる方が小泉君で、また笑ひながら答へる方が澤木君であつたことも書いて置きたい。

翌年の三月、私が三年近くも辛抱したシモネエの下宿を辭して、そろ／＼歸國の支度をするために引移つたのもその旅館だ。阿部君は二階、私は三階で、晝に晩に附近の希臘飯屋へ連立つて出掛けたのもそこからだつた。日本銀行の青木君、葡萄栽培の研究にこゝろざして居た印東君、臺灣總督府昆蟲研究所の素木君、醫學士荒井君、それから旅行者の中の旅行者ともいひたい西澤君、これらの諸君の中



エトランゼエ

四三二

にはセレクト・ホテルの客ではなかつた人もあるが、いづれも同じ旅館の記憶には繋がれて居る人達だつた。モン・モランシイといふ町の方に住んで居た日佛銀行の鈴木君夫婦が阿部君や私の部屋を見にその旅館へ訪ねて来て呉れたこともあつた。鈴木君、阿部君、この人達は何程私に旅の便宜を與へて呉れたか知れなかつた。

エトランゼエ終

大正十一年九月二十日印刷  
大正十一年九月廿三日發行



『エトランゼエ』

定價金壹圓七拾錢

著者 島崎春樹

發行者 和田利彦

印刷者 土谷清隆

印刷所 博文館印刷所

發行所 春陽堂

東京市小石川區久堅町一〇八番地

東京市日本橋區通四丁目五番地

電話本局五一・四二一〇番  
振替東京一六一七番

圖書目錄進呈

往復葉書にて御申込み次第

春陽堂



島崎藤村著作

藤村詩集

(内容) 若菜集 秋の思—六人の處女—生のあけ  
夏草 ほの—深林の逍遙  
落梅集 春やいづこに—新潮—農夫  
千曲川旅情の歌—胸より胸に—  
壯年—椰子の實—其他

定價壹圓五拾錢  
郵送料拾貳錢

日本の詩壇は前後二期に分  
たれる。自然と人生を融合  
するためには拂はれた新體詩  
時代の氏の努力がいかに自  
由詩への寶玉となつたか。

藤村文集

定價九拾五錢 送料八錢

本書は實に「藤村詩集」と相對關係の地位に  
あるものにて、凡て詩に依り表白し得ざる  
青年時代の自由奔放なる思想感情の結晶し  
たるものである。されば「藤村詩集」を愛誦  
する人は必ず本書に依つて其の缺を補ひ、  
本書を手にする者は亦「詩集」に依つて氏の  
眞姿を捉ふべし。

水彩畫家

定價八拾五錢  
送料六錢

名家傑作叢書の第四篇にして、藤村氏が青  
年時代に於ける感激にみちた小説、水彩畫  
家、朝飯、老嬢、藥草履、爺、津輕海峽、  
椰子の葉蔭、家畜を収めた手ごろの小説集  
である。

エトランゼエ

近刊豫告

大正十一年  
九月出版の豫定

島崎藤村著作

新生

全二卷 完結  
四六判八七〇頁  
各定價壹圓八拾錢  
各郵送料十二錢

阿部次郎氏の評に曰く「今年は障る事が多くて  
殆んど新作を読みませんでした。僅かに讀ん  
だものうちでは島崎さんの「新生」後篇を一  
番愛讀しました。おしまひの方などは毎朝新聞  
を待ちかねて深い敬愛の念を以て拜讀しまし  
た。出發點が過失であることは固より云ふまで  
もありませんが、その過失をこれほどまでに淨  
めることが出来れば、過ちも徒爾ではなくなる  
と思ひます。新生後篇は淨めの過程を精寫せる  
ものとして單に藝術的價值のみならず倫理的教  
育的價值を持つてゐると信じます。」と。本書が  
明治大正文壇を通じて有数の著作なるは何人も  
否まざるべし、一切を棄てし著者此不朽の名著  
に甦る、本書一度世に出づるや、印刷能力以上  
の賣行を見る、眞に我が文藝界思想界の爲めに  
慶賀すべきことなり。

千曲川のスケッチ

金壹圓四拾錢 送料十二錢

「もつと自分を新鮮にそして簡素にしたければ  
ならない」やがて大藝術を生むに至つたこの尊  
い自覺から、遙か信州信濃の山奥に逃れた著者  
の、小語、淺間、千曲川べり一帯に於ける青年的  
感激に盈ちた生活記録。自然と人生の温かき抱  
愛に接せよ。

新片町たより

金壹圓四十錢 送料十二錢

「千曲川のスケッチ」時代の瞑想期は、愈々人  
として生き、愛し、死ぬる「生」を、如實に表現  
すべき道程に至つた。既に業に、大藝術家の面  
目を贏ち得たる著者が、この「新片町時代」は實  
に街頭に立つて、人及び藝術家としての使命を  
果す闘ひのときである。

巴里たより

金壹圓二十錢 送料十二錢

闘ひに疲れたのではない、敗れたのでは勿論な  
い、然し何の爲に慈母亡き幼兒數人を殘して遠  
か異極へ旅立たなければならなかつたか、それ  
はこの「巴里たより」及「新生」に盡されてゐる。  
實に氏は現實を總括して自分及そを育む周囲の  
深視を續けてゐたのだ。



# 櫻の實の熟する時

藤村著

四六判洋装  
價壹圓貳拾錢  
送料十一錢

たとへばみづくしく萌え出づる新芽の如き少年期より、やがて、青年期に至る迄を描いたのが、この作品である。天真と清純、華麗と憂鬱を併せ有し、而かも雨を凌ぎ、風を避けつゝ、歩一步復雑なる人生の渦巻に進み入る若き生の波瀾に富める姿は、正に藝術の好題目である。藤村氏のこの稿の完成を見るに至る迄殆んど数年の歳月を費す。或は砲聲響く巴里の客舎に、或はまた佛國中部の片田舎なるリモオジユの旅に。その藝術的香氣の芳烈なる描かれる人物の澄澗として生けるが如き、眞にこれ「櫻の實の熟する時」の輝かなる日光と、すべての生命の伸び行く生々の氣の中より生れ出でたる如き、光輝ある藝術たるを失はば、若き人々にとつて共唱深かるべきは勿論、既に青年期を過ぎたる人々と雖も興味措く能はざるものがあらう。而かも、其の主人公を「新生」の主人公が若き時代にとれるを以て、この二著は併讀されべきものである。

## 田舎教師

花田山作

金壹圓卅錢 送料八錢

田山氏は我が自然主義運動の偉大なる先驅である。氏は何人も熟知する處である。氏の熱情的感情と偉大なる人格と絢爛なる筆致とは日本の産める作家中まれに見るものである。殊に本篇は氏の出世作として定評あるもの、販賣部數に於ても既十萬部を算して餘りあるものである。

## 運命

國木田獨步著  
壹圓卅錢 送料八錢

内容は、運命論者、巡査、酒中日記、馬上の友、惡魔、畫の悲しみ、空知川の岸邊、非凡なる凡人、日の出の九篇。原稿料は作の長短によるものではない、努力と出来ばえとによつて定まるものであると絶呼した詩人的天才作家のよき作を収めた小説集である。

# 長塚節氏著

## 長塚節歌集

平福百穂氏裝  
四六判特製本  
第五版刷本  
貳圓六拾錢  
送料拾八錢

自然に抱愛せられたる人間の聲を聞き、人間に抱愛せられたる自然の囁きを聞かんとするものは本歌集に來れ。「土」炭燒の娘によりて不朽の文名を贏ち得たる自然詩人田園詩人としての長塚氏の素朴健實なる詠風は近代人に「心のふるさと」への親しきくちつけを許すものである。

## 小説

夏目漱石氏推稱  
壹圓五拾錢  
送料金拾八錢

暗愚なる農民の魂を描ける一大郷土藝術である。漱石先生の序文の中に「面白いから讀めといふのではない……苦しいから讀めといふのだと告げたひ……何も考へずに生長した若い女(男でも)の起す菩提心や宗教心は皆此暗い影の奥から射して來るのだ」と。ほんとに本書の如きは萬人の讀むべき、殊に若き男女の讀まねばならぬ名作である。(第十二版)

## 山鳥の渡

壹圓七拾錢  
送料十八錢

郷土藝術の處女地を開拓して不朽の文名を馳せた不出世の天才長塚節氏が世に遺した、未だ發表されなかつた貴重な遺文集である。收むる處、歌、感想、隨筆、評論、書簡等、眞摯で素朴な故人の全人格が最も端的によく窺はれる(第三版)

## 炭燒の娘

壹圓八拾錢  
送料十八錢

人生及藝術に對する信實を表白せる永遠の作品集である。自然に見離された近代人の心に親しみ深き哀歌を響き、日々崩壊されてゆく吾等の最後の砦をわづかに確守してくるものは、この集に収めた長塚氏の藝術であらう。(第四版)



著氏吉茂藤齋

歌集 あらたま

正岡子規氏 四六判特製本  
平福百穂氏 金貳圓四拾錢  
木下杢太郎氏 繪 送料金拾八錢

「赤光」は宛ら噴火口より迸り出た熔塊であつた。而し噴火口の内面には更らにそれ丈けで済まされぬものがあつた。此のもの直ちに地殻の内面無限の深さに通じてゐる。前の熔塊は急にして早く迸り出た。後のものは更らに成る熱度と壓力と衝迫とを具へなければ迸り出ない底のものである。前の熱さに深さが自ら加はつて来たのである。「赤光」以後の君の歌が左様なものに進んで行つたことは君の制作に注意してゐる多くの人々の認めてゐる所であると思ふ。君は人に知られない多くの苦惱を持つてゐた。近頃更らに深い人間苦を自分の胸の裏から見出した。時々世に示すものは君の制作が益々人生の深所を目掛けて進みつつあることで、その片鱗にも覗ふことが出来た。「赤光」以後七年の諸作を輯めたこの「あらたま」は君の胸底深く潜んで容易に發せなかつた悲しき熱塊である。

童馬漫語

貳圓五拾錢 送料拾八錢

アララギ派の重鎮、現日本歌壇の巨星として衆望を一身に集めてゐる齋藤氏が、九年の間、歌よむひま／＼に感じたこと共を書き連れた隨感録である。短歌の眞義、作歌法、その態度、批評註釋等百五十有餘項に亘り、珠玉を連れた様な文字で全篇が滿されてゐる。(第四版)

短歌私鈔

壹圓六拾錢 送料拾八錢

齋藤氏が私淑する三歌聖、源實朝、僧良寛、僧愚庵の秀作を選び、その明徹な頭腦と清澄な情想とを以つて原作の精神を汲み奥儀を尋ね註釋を施したのが本書である。この三歌聖の歌風を基ひこの著者の歌壇的地位を知るものは一人として本集を座右に置かねものはあるまい(第四版)

荷風全集

永井荷風氏著 各卷

合判六百八十頁位 金貳圓七拾錢 書留送料拾八錢

日本は藝術の國である。江戸はその精粹の地である。どつしりそこに基調を置いて、去來する泰西藝術の雲行きを靜かに眺めてゐるやうな荷風氏の藝術は、その氣稟に於て、その風格に於て最も藝術らしい藝術である。實に荷風氏は、生れながらの作家と云ふべく、天才的と云ふこと氏にして初めてふさはしきを感じる。絢爛多彩の文は練熟の妙を極め複雑多面の想は飽くまでも独自の境を有す。讀者よ、この魅力ある藝術に接し美酒の如き芳烈なる香氣に酔へ。

- 第一卷 野心、地獄の花、夢の女、女優ナ、洪水、エミル・ゾラと其小説。 第五版
- 第二卷 あめりか物語、ふらんす物語、西遊日誌鈔。 第四版
- 第三卷 冷笑、歡樂、深川の唄、新歸朝者日記、監獄署の裏、父の恩、珊瑚集、曇天。 第三版
- 第四卷 すみだ川、新橋夜話、小品集、紅茶のあと。 第三版
- 第五卷 散柳窓夕榮、戀衣花笠森、花瓶、支那人、うぐひす、腕くらべ、おかげ。 第三版
- 第六卷 妾宅、大窪多與里、日和下駄、斷腸亭雜藥、書かでもの記、小説作法、江戸藝術論、斷腸亭尺牘。 第三版
- 第七版 編輯中 未刊



外18冊  
け

# 菊池寛全集

菊池寛 氏 著

各卷

合判特製本  
貳圓五拾錢  
送料拾八錢

現下日本文壇第一の寵兒菊池寛氏の名聲は管内に喧傳されてゐるばかりでない、今や世界的作家として中外の譽望を一身に負つてゐる。その作品「恩讐の彼方」は英伊に於て「蘭學事始」は和蘭に於て、孰れも翻譯刊行され多大の好評を博してゐる。また「ある敵討の話」奇蹟は近代劇中の佳作として米國の劇壇に紹介され、「父歸る」は紐育倫敦の大劇團によつて公演された。第五篇以下續刊。

## 第一卷

■ 内容  
身投救助業、三浦太郎右衛門の最後、第一人者、海鼠、恩を返す話、或敵打の話、勳章を貰ふ話、盗みをしたN、若杉裁判長、大島の出来る話、無名作家、恩讐の彼方に、盗人を倒す、群衆、悪魔の弟子、病人と健康者、道を訊く女。

◇ 第五版

## 第二卷

■ 内容  
眞珠夫人全篇

◇ 第五版

## 第三卷

■ 内容  
葬式に行かぬ譯、我鬼、ある抗議者、たちあな姫、藤十郎の戀、まどつく先生、小説灰色の檻、女と女との間、神の如く弱し、簡単な死去、奥付の印、出世、形、勝負事、義勇、盗者被盜者、M侯爵と寫眞師、極樂、笑ひ、名君。

◇ 第五版

## 第四卷

■ 内容  
蘭學事始、入れ札、亂世、義民甚兵衛、西南奇聞、俊寛、船醫の立場、姉の覺悟、ある青年、祝盆、海の中にて、由良之助役者、將棋の師、マスク、天の聖劑、ある青年、祝盆、妻の非難、悪因縁、おせつかひ、齒痛、R、啓吉の誘惑。

◇ 第五版

## 第五卷

■ 内容  
未定

◇ 近刊

## 第六卷

■ 内容  
未定

◇ 近刊



~~304~~  
~~278~~ 915.6  
SH45



終

